



研究フォーラム

「母国」に「帰国」した移民から故郷の意味を問う

なぐら きょうこ
奈倉 京子

静岡県立大学専任講師

移住先国で生まれ育ち、いまだ見ぬ「母国」へ「帰国」することになった移民の第二世代以降の人びとがいる。彼ら／彼女らにとって「母国」は「故郷」か「他郷」か。帰国した人びとが日常生活の実践のなかでつくり上げてきた文化、組織的活動、人間関係のサークルをとおして検討してみたい。

帰国華僑の「異文化」体験

わたしはこれまで帰国華僑を考察してきた。帰国華僑とは文字どおり帰ってきた華僑華人（個人、集団の両方を指す）のことである。ここではおもに、中華人民共和国誕生前後の一九四〇年代から一九七〇年代に東南アジアから帰国した華僑華人を対象とする。この時期の帰国の理由は大きくふたつある。ひとつは、第二次世界大戦以降、東南アジア諸国における国民国家形成の動きのなかで、華僑排斥運動が激化し、（半）強制的に帰ることを迫られたため。もうひとつは、中華人民共和国成立前後の一九四〇年代から五〇年代を中心に、中国（大陸）で進学するため、もしくは革命運動に参加するために、自ら進んで、あるいは両親の勧めで帰国を選択したのである。

フィールドで出会った帰国華僑と接していると、わたしとは国籍、年代などの条件は異なるものの、彼ら／彼女らと同じ気持ちになることがあった。それは留学生として異国の地にいるわたしと、共通する事柄があったからである。彼らは帰国当時、籍貫（父方祖先の出身地）を知っているものの、そこに家がなく、親族との連絡も途絶えてしまった人が大部分である。つまり、血縁・地縁上、一応は中国にゆかりがあるものの、彼らにとって実際、中国は「外国」であった。移住先地では、現地のこと

自分の力でやっていくかの選択を迫られた。彼女は政府に従うことを選び、江西に落ち着くことになり、地元の中芸に編入した。ミャンマー時代、中華学校に通っていた。勉強が好きで、将来は中国の大学に進学し、教師になることが夢であった。ところが、江西では政治動乱のために授業を受けられない日々が続いた。高校卒業後は政府により靴下製造工場に配属され、退職までそこで働いた。「工場に配属されたときには地獄に突き落された気持ちだった」と、彼女は語る。ミャンマーの中華学校で聞かされていた理想的な中国と、現実の中国とのあいだには、大きなギャップが存在したのであった。彼女はずっと帰国を後悔していた。しかし、二〇〇九年、帰国後初めてミャンマーに親戚訪問に行き、ミャンマー経済の遅れを目の当たりにしたとき、「近年の中国経済の発達をみると帰国は正しかった」

と思うようになった。彼女は、ミャンマーから中国の江西、そして厦門と移動を繰り返してきた。どこ出身かと聞かれたとき、「安溪人と答えると発音が違うと言われる。江西には一番長くいたけれど、特に気にかける人もいないので愛着を感じない。今は厦門に家族がいるのでここが居場所。でもこれから息子が落ち着く場所に移動するかもしれない」。

彼女の故郷認識は、中国かミャンマーという国家を基準にすることや、籍貫がどこにあるかということのみならず、家族、親戚など自分にとって大切な人が今どこでどのような生活を送っているかということにも密接にかかわっている。更に、中国の政治的・経済的・文化的政策の変化や元移住先と中国との関係もまた故郷認識に影響を与えている。帰国華僑にとって「故郷」とは、周囲を取り巻くさまざまなファクターによって意味づけられ続ける流動的な概念である。

「故郷」について問う

生活経験のない「母国」へ「戻ってくる」「移民」として「帰」（戻ってくる）が何を意味するのかということについて追及するには、当事者が置かれた時代の国際社会的状況、出身国と移住先国との歴史・政治的・経済的関係や宗教的要因、家族や個人の価値観、社会的立場や経済



帰国華僑が集住する広東省台山（タイシャン）市華僑農場のインドネシア帰国華僑の長屋型の家屋

ばや中国の地方語（広東語、客家語、閩南語等）を話していたため、帰国してから改めて「普通話」（標準中国語）を学び、地元の気候、農作業、生活習慣といった「異文化」に適応していかなければならなかった。なかには心理的に不安定で、中国に根を下ろすことができず、再び第三の地へ移住したいと強く思っている人も見られた。実際に、香港、アメリカ、オーストラリアなどへ再移住している人も少なくない。

あるミャンマー帰国華僑女性の運命

わたしが「母」として慕うミャンマー帰国華僑の女性（一九五三年生まれ・籍貫は福建省安溪、厦門在住）がいる。彼女は一九六七年、ミャンマーのヤンゴンから近い小さな町から姉と二人で帰国した。雲南に着くと、今後の生活を政府に任せるか、

状況など多様な要素を考慮しなければならぬ。従って、かわる国家や地域によって帰国した移民の性格も、「帰」の含意も異なってくるため、さまざまな地域の移民の比較研究をおこなうことによって初めて「帰」との対話が可能になるであろう。

このような問題意識から組織されたのが、民博の共同研究「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」である。本共同研究では、アフリカ、フランス、ベトナム、日本、中国（大陸・台湾）、ニューギニアといった地域を対象にしている。そこで生きる「母国」に「戻ってきた」移民個人の生活世界、戦略的な生き方の選択、公的史観や血筋、身体的特徴、移住先でえた文化的要素や人間関係がいかにして彼ら／彼女らの生活を制限しているか、あるいは利用されているか、といったことについてミクロな視点から切り込み、実証的に考察する。それにより、移動によって故郷認識がどう変化するのか、どのように「故郷」が「創出」されるのか、または「故郷」は永久に固定されたものなのか、といったことについて検討していく。

共同研究

「帰還移民の比較民族誌的研究

——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」

代表：奈倉京子

2011年10月～2014年3月



ベトナム帰国華僑がつくる筒型の粽（ちまき）